

ど前の北中城夏祭り、「日出克（ひでかつ）」が唄う「ミルクムナリ」を素足のままでダイナミックに舞う若者を目にした時からである。日出克が唄う歌詞がこの若者の作であると知っての感動と共に、全身からエネルギーを発し舞う姿に唖然とし、ある種の衝撃を受けたものである。

ミルクムナリは、南島詩人である平田氏の作詞であり、作曲は日出克である。この曲は、15年も前に作られたものの、今でも祭りやエイサーなどでよく耳にし、今や近代沖縄の代表曲に挙げられる。小学校の運動会でのエイサーで、県外の中高生のエイサー体験曲として用いられていると共に、エイサー曲としては県内外のみでなく世界にも広まっている。恐るべき楽曲である。

「ミルクムナリに匹敵する楽曲を創れないものか」その思いをついに実現できる機会に巡り会えた。不可能が可能になり得る瞬間であった。早速、平田氏にミルクムナリのすごさを語り、あれから20年近くを経て、ここでぜひ新しい楽曲を作り、子供たち、中高生、そして県外からの観光客、そしてそれをさらに広めて、果ては琉球大学土木工学科のテーマソングにしたい。また、土木ルネッサンスのテーマソングにしたい。話の内容はかなり野心的であった。平田氏は、「ぜひやりましょう」の一言で、引き受けることとなった。

さて、話は進むものの、平田氏はその名を世に馳せるプロ中のプロである。その彼率いる平田軍団を動かし、1つの公演を行うには、まず先立つのが、なにを置いても「金」である。いくらかかるか大体の想像は私にはついていて、平田氏に「予算は大丈夫」と伝え、安心して頂いた。しかし、平田氏が何度も大丈夫ですか？ という旨の質問をされていたことを考えるとそう単純に納得されていた状況ではなかったのかもしれない。

恐ろしくて、同窓会事務局にその金額をすぐには提示できない。同窓会側には、想定していた半額ほどの予算でとりあえずは説明した。半額の提示でも同窓会にしてみれば、想像を超える金額である。「予算がこれまでの2倍かかっても、その効果が5倍や10倍になるなら満足でないか？」という旨の説明を行うのがやっとである。ここら当たりの説明は金城会長の説明に詳しい。楽曲まで作るとなると、本当は2倍ではきかない話であった。

やはり暗礁に乗り上げた。同窓会挙げての募金活動が報告のたびに当初の半分くらいに収束していく傾向にある。業界は、そして同窓会員の多くは、やはり厳しい状況に置かれていることを実感させられる。「楽曲」あきらめるしかない。ないものはない。同窓会事務局からは、楽曲作成を断念せざるを得ないと説明される。

これでは、平田氏に合わせる顔がない。また、公演の成功も半減するに違いない。楽曲なしでは、成功はあり得ない。それとなく、平田氏に遠まわしで聞いてみた「楽曲、創りますよね？」、「ぜひ創りましょう」「私は今度の楽曲創りに本気で取り組んでいる」と返してくる。さらに、時間が経ち、ついに平田氏に「思うように予算獲得がいかず、当初の8割程度になる可能性がある」と告げるときが来た。平田氏は、「最善の策に最善を尽くす」「ぜひ成功させましょう」という。



50周年記念式典で挨拶する平田大一

楽曲創りの断念もどう伝えていいものか悩んでいるとき、「ある！」あったのである。他界した弟が残したわずかばかりの金があった。私は、その全てを楽曲作成にかけた。これで実現できる。公演を平田氏に任せたいという話に、身を乗り出し「それがいい、それがいい」と応えてくれた彼の全ての金をこの楽曲創りに捧げることとなる。

楽曲創り、舞台稽古は終盤を迎えつつある。平田氏は、同窓会の想い、私の想い、平田氏の想い、そして「土木ルネッサンス」への想いを、楽曲「ダイナミック琉球」という形で応えてくれた。

「生きていることはすばらしい」「気づいたときが出発点である」「自分を必要としている人が必ずいる」そうしたメッセージが込められている。そして、「母と子の夢」を実現させるシギラの神、美しい宮古島の海と空、「恵み輝けよ」と島の想いが込められている。この想いが若者の心に響き、勇気となり、生きる力となることこそがこの楽曲創作の意味である。



宮古島前浜海岸の夜明け

(第24回宮古島トライアスロンスーパーバイザー長浜幸男氏撮影) 宮古島「恵み輝け」プロジェクトより